

第8回協働実践研究会報告

2015年2月21日(土)に早稲田大学26号館7階で第8回協働実践研究会が開催されました。今回は56名の参加者がありました。

パネル・セッションが1つ、ポスター発表が5つ、口頭発表が2つという内容でした。

◇パネル・セッション 13:10~14:55

テーマ:実践の共有によって教師は何を学んだのか

趣旨説明:館岡洋子(早稲田大学)

パネリスト:

江原美恵子(早稲田大学), 小笠恵美子(東海大学), 神村初美(首都大学東京),
中尾桂子(大妻女子大学短期大学部)



パネル・セッションでは、2013年3月に立ち上がった「協働実践プロジェクト」に継続参加してきたメンバー4名がパネリストとして登壇し、プロジェクトの場でどのように自身の実践を語ってきたのか、それによってプロジェクトがどのような場として機能していたのかをふり返って語りました。パネリストはそれぞれ、自身の実践に対する課題、または課題に対する認識度が異なり、職場や実践内容も多様という状況がありましたが、プロジェクトの場を「実践共有の場」と捉えて共有することによって、自身の実践を客観視するまなざしを得たり、自身の課題やビリーフを確認したりする場になっていたことが報告されました。

パネリストによる情報提供後のフロアとのやりとりでは、4名が異なる職場に属する実践者であること、各自の実践が行われた現場を直接には知らないことが、マイナスではなくむしろプラスに奏功して、課題点を浮き彫りにすることに結びついたことなどが確認されました。その要因として、同じ職場の人であったら「見えすぎてしまう」こと、ときには傷のなめあいになってしまうことが、メンバーが違う職場に属するため回避できるのではないかという意見がパネリストから挙がりました。

このパネル・セッションから、実践者が自立しつつ協働する場として「協働実践プロジェクト」が機能していることが見えてきました。

◇ポスター発表 15:00~16:15

1. 「『正しさ』を求めない場の創出を目指して『言語教育と実践を考える会』における二つの実践の試み」

鈴木綾乃(早稲田大学), 牛窪隆太(関西学院大学), 梅津聖子(拓殖大学), 江原美恵子(早稲田大学), 古賀和恵(早稲田大学), 佐藤正則(早稲田大学), 山本実佳(国

際交流基金)

2. 「2014-2015 年度協働実践研究会北京支部活動報告-中国における協働による学びを通して何を指すのか-」

菅田陽平(北京第二外国語大学), 駒澤千鶴(北京国際関係学院), 朱桂栄(北京外国語大学)

3. 「トンガにおける中等教育日本語シラバス及び教科書開発の実践-協働的開発プロセスから得たもの-」

金孝卿(大阪大学), 三浦香菜子(お茶の水女子大学大学院生)

4. 「私たちの現場の問題をどう捉えるか -多様な視点を共有する「滝」-ワークショップの報告-」

西山 友恵(東海大学), 久野 由宇子(東海大学)

5. 「台湾協働実践研究会の現状及び課題-継続の可能性及び省察的教師成長の可視化-」

荒井智子(銘傳大学), 羅曉勤(銘傳大学), 張瑜珊(新生医護専門学校)

1. 「『正しさ』を求めない場の創出を目指して-『言語教育と実践を考える会』における二つの実践の試み-」

2013年に発表者たちが立ち上げた「言語教育と実践を考える会」では、2つの場づくりをしてきたそうです。ひとつは、「正しさ」を求めない場の創出をめざし、授業の中で生まれた疑問を教師同士が話し合う「授業勉強会」で、もうひとつは、話題提供者の発題をもとに特定のテーマの下で議論を行う「研究会」です。

「授業勉強会」では、「文法の扱い方について」「学生が「考える」授業について」「読解の目的について」など授業と関連するテーマが扱われ、また、「ように／ためにをどう教えるか」「～んですの教え方について」など具体的な文法項目が取り上げられた回もありました。授業における「直近の問題」をみんなで持ち寄って解決するという意味がありそうです。それに対して、「研究会」のほうでは、直接、授業に関係することというよりは、教師として共通にもっている関心事、たとえば、「私がおもつ「学習者」観・「教育」観」や「言語教育における学習者のモチベーションを考える」などについて、誰かが話題提供をし、それについて参加者みんなでディスカッションをするというものです。誰かが「教える」のではなく、みんなで対等に話し合う場となっているようです。

午前中のパネルとも共通する「教師たちが実践を共有する」ということの意義を感じました。聴衆のひとりで韓国語を教えている人から、自身もこのような勉強会をしているが、どのようにしたら「参加者主体」で場づくりができるかといった質問も出されていました。

2. 「2014-2015 年度協働実践研究会北京支部活動報告-中国における協働による学びを通して何を指すのか-」

中国北京では 2010 年に協働実践研究会北京支部が設立され、その年に 2 回の勉強会を開催したものの、その後は活動が途絶えていたそうです。しかし、2014 年 4 月に中国日本語教育



学会の最終日に、北京支部による協働実践研究会が開催されました。そこには日本から協働実践研究会のメンバー数名が参加(館岡、池田、古屋、神村、銭坪)し、ポスター発表とラウンドテーブルが行われました。ラウンドテーブルの形態は中国では初めてのことでしたが、5つのテーブルはどれも協働学習について非常に活発な議論ができました。これがきっかけとなり、その後、月に1回の研究会を定期的で開催しているそうです。参加者全員が自分の実践を報告し合い、自分の抱えている問題について議論する場として継続しているそうです。発表者の菅田氏は、北京のような海外で協働研究会を継続するためには、日本や海外の他地域の情報交換やサポートが非常に意味のあることだと語っていました。



3. 「トンガにおける中等教育日本語シラバス及び教科書開発の実践-協働的開発プロセスから得たもの-」

この発表では、トンガ政府による教育改革および新しい教授・学習パラダイムによるカリキュラム作成の要請に基づき、青年海外協力隊員(シニア海外ボランティア、日本語教師)、現地の日本語教師会(JLTAT)、国際交流基金の日本語教育専門家(シドニー日本文化センター)が協働で取り組んできたプロジェクトの報告がなされました。トンガにおける中等日本語教育の位置づけや、他の外国語(中国語、フランス語)のカリキュラムとの関係について意見交換が行われました。特に、トンガの言語や文化を積極的に位置づけた新教科書『えがお』の内容や、プロジェクトの経緯が類似した国・地域に示唆される点などについても意見が共有されました。最後に、それぞれ異なる立場でプロジェクトに参加した発表者から、全体のビジョンの共有と遠隔地での連絡網の重要性は勿論のこと、現地の日本語教師との対話の重要性、組織の壁を超えるための努力の必要性を学んだとの声が挙げられました。

4. 「私たちの現場の問題をどう捉えるか -多様な視点を共有する「滝」-ワークショップの報告-」

この発表では、日本語クラスや学習者への対応といった実践現場の問題を教師間で共有し、解決するために企画・実施されたワークショップの報告がなされました。ワークショップでは、同じ職場に属す教師たちが4つのグループに分かれて、グループでひとつ、事例(現場の中で起こった問題)を挙げたそうです。事例を「滝の源流」、になぞらえ、その「滝の源流」について、自分ならどう対処するかを、ひとり一枚、手のひらサイズの紙に書き、それをペーパーファスナーで留めていき、どんどん長く連ねたものが、この発表でメタファーとして用いられている「滝」です。ワークショップでは、参加者が4つの事例とその対処法を見て回ることで、つまり「滝めぐり」をし、その後で「滝」の行き着く先である「滝つぼ」づくりとして、この事例を見ることによってどんな新しい発見があったか、未解決の問題を確認することが行われたとのこと。このワークショップによって問題を言語化する機会を得たり、隣のクラスで起きていることを知ったり、解決のヒントを探ったり、未解決の問題を共有することができたという報告でした。

5. 「台湾協働実践研究会の現状及び課題-継続の可能性及び省察的教師成長の可視化-

この発表では、「台湾協働実践研究会」の歩みとして、台湾における、2007 年から現在に至るまでの活動が報告されました。

会のメンバーたちは、大学評価制度実施に伴う厳しい雇用状況などのプレッシャーがある中で、文献購読などを続けてきたそうです。しかし 2011 年にはコアメンバーの辞任によって活動場所を確保するのが難しくなり、そこからは個人のピア・ラーニングの研究活動が中心になる時期が 2013 年まで続きました。2013 年 11 月、東京で開催された「第 6 回協働実践研究会 日本語教育における協働学習実践研究シンポジウム」に台湾で協働を実践・研究する教員数名が招聘されたことがきっかけとなり、コアメンバーが新しく結成され、新たに会が再開しました。その後まもなく、台湾政府の研究補助金が受けられるようになり、理論的な学びを継続しつつ、実践を共有する場を定期的に持つことによって満足を得ることができ、メンバー間の協働が継続的に自分の実践を省察するための力になっていることが報告されました。



◇口頭発表 16:20～17:20

1. 16:20～16:50

「協働学習におけるクリティカルリテラシーの実践に向けて-『ただの概念理解』から『概念の内在化』へ-」 Ohri Richa (千葉大学)

2. 16:50～17:20

「協働学習と『新しい評価』の試み-日中 2 大学における実践報告-」
銭坪玲子(長崎ウエスレヤン大学) 周璞(中国 重慶大学外国語学院日本語科)

1. 「協働学習におけるクリティカルシンキングを促す授業の試み-『ただの概念理解』

から『概念の内在化』へ-」では、「ステレオタイプ」を題材とした 2 つのタイプの授業の、実践者自身による批判的な検討という形をとった分析が発表されました。

1 つめのタイプの実践では、ステレオタイプの定義や機能の解説、話し合い、コメントシートの記入、プレゼンテーションという流れで行われました。その結果、学生のプレゼンからは、学生がステレオタイプの理解が“ただの概念理解”にとどまったことが示唆されました。

2 つめのタイプの実践では、「読み物」、「対話」、「課題」の 3 点に重点を置き、事前課題として学生は「ステレオタイプ」にまつわるさまざまなタイプの読み物をあらかじめ読んで授業に臨んだほか、「差異はなぜ必要なのか」など対話のキューを用いて授業における対話を促し、自由度のあるチャレンジングな課題を与えての授業展開がなされました。その結果、学生のプレゼンには自己との



関連付けや社会への批判的な問いの投げかけといった、自己のものの見方に対する捉え返しが見られたことにより、2 つめの授業実践によって、学生の「ステレオタイプ」のが“ただの概念理解”から“概念の内面化”に至ったと結論付けられました。対話で新しい視点を獲得すること、既有知識を前提せず、再度検討してより深く気づいていくことにより、クリティカルリテラシーを養っていくこと、それを支えるものとして協働学習がある、という発表者のまとめに、会場から深いうなずきがありました。

2. 「協働学習と『新しい評価』の試み-日中2大学における実践報告-」-日中2大学における実践報告-」は、長崎ウエスレヤン大学と重慶大学での日本語授業での、ピアで作成した評価基準表による発表活動の実践報告がありました。学生自身の手で評価基準を作成した上でパフォーマンスを行い、それに対するピア評価を行い、ふりかえり、さらにそれを次なる評価基準の作成につなげていく、という円環が「協働学習における学びのサイクル」として位置づけられました。発表者からも、新しい学びをいかに評価するか、また、何のために評価するのかという問いへの議論が不可欠であると結ばれました。

最後の発表でも論点になった、「いかにして評価を行うか」は、協働実践研究会における発表でもたびたび議論になる点でもあります。あらゆる現場に、その現場なりの困難や限界があり、異なる現場、多様な実践者に常に選択可能な唯一の答えを見つけ出すのは不可能であるなか、実践者の経験に耳を傾け、それぞれの取り組みではどうであったのか、率直に意見を交換することができました。これは協働実践研究会ならではの良さではないかと思います。「協働」に魅力を感じる一人の実践者として参加できる協働実践研究会の場が、「協働」を後押しする場であり、それぞれの協働をうまく展開するための知恵を交換する場になっていることを感じました。



最後に、前日までの準備および当日の会場設営、運営には、古屋憲章さん(早稲田大学日本語教育研究センター・助手、同大学院日本語教育研究科・博士課程)、孫雪嬌さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士課程)、加藤駿さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)、堀見早さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)の活躍があったことを付記したいと思います。18:00 からは早稲田大学近くの「うるとらカフェ」に場を移し、36名の参加者で懇親会が行われました。大変大勢の方にご参加いただき、和やかで楽しい会となりました。海外を含め遠方から出席して下さった方も多く、発表者のみなさんには一言ずつ感想など語っていただきました。協働実践研究会を知ったきっかけや研究会に対する思いなど、発表では聞けないお話もうかがうことができ、懇親の場として大変有意義な時間を過ごすことができました。参加して下さったみなさま、ありがとうございました。

最後に、前日までの準備および当日の会場設営、運営には、古屋憲章さん(早稲田大学日本語教育研究センター・助手、同大学院日本語教育研究科・博士課程)、孫雪嬌さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士課程)、加藤駿さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)、堀見早さん(早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)の活躍があったことを付記したいと思います。18:00 からは早稲田大学近くの「うるとらカフェ」に場を移し、36名の参加者で懇親会が行われました。大変大勢の方にご参加いただき、和やかで楽しい会となりました。海外を含め遠方から出席して下さった方も多く、発表者のみなさんには一言ずつ感想など語っていただきました。協働実践研究会を知ったきっかけや研究会に対する思いなど、発表では聞けないお話もうかがうことができ、懇親の場として大変有意義な時間を過ごすことができました。参加して下さったみなさま、ありがとうございました。